

# 引揚げと「未引揚げ」のあいだ

——朴裕河『引揚げ文学論序説』を手がかりに——

原 佑介

## 1. はじめに——植民者二世の「微妙な「位置」」

朴裕河先生の『引揚げ文学論序説——新たなポストコロニアルへ』を論じるにあたり、私からは、論点を二つにしぼってお話をさせていただきたいと思います。ひとつは、「引揚げ文学」の担い手たちの歴史的立ち位置についてです。もうひとつは、「引揚げ文学」とある面できわめて深い関係性のある、「未引揚げ文学」としての在日朝鮮人文学についてです。

まず、本書でとり上げられた文学者たち、つまり「引揚げ文学」の担い手になったのはだれか、という問題ですが、これは本書が扱って立つ根本的な視座にかかわることです。「対象としては、明治以降、朝鮮や中国などへ渡っていった日本人の子どもとして生まれ育ったか、幼少期に親とともに渡って行って、青年期の前後までをそこで過ごし、敗戦後に戻ってきた人たちを中心としている」とあるように、この本のもっとも基本的な特徴は、多種多様な背景をもつ引揚者のうち、とくに植民地で（生まれ）育った日本人の植民地体験と引揚げ体験、そして戦後体験に着目した点です<sup>1)</sup>。この切り口で統一的に進められた研究は、単著としては戦後日本文学研究においてはじめてのことではないかと思えます。本書の研究史上の意義は、なによりもまずこの点にあります。

藤原ていの『流れる星は生きている』が代表的な例ですが、引揚げ直後から1950年代ごろまでは、引揚げにかんするテキストのおもな書き手になったのは、一世たち、つまり大人になってからなんらかの理由で植民地に渡り、しばらくのあいだそこで生活し、日本の敗戦を機に植民地から引揚げた人たちでした。おもな理由はおそらく割と単純で、戦後の早い時期に本を書ける年齢に達していたのがかれら一世たちだったからでしょう。藤原の手記がひろく読まれ、映画化されるなど、この世代の人びとが生み出した膨大な量の引揚げ物語が戦後社会に受容されることによって、台湾や朝鮮、満洲などに入植していた人びとのイメージは、文字どおりの「引揚者」として定着していくようになります。それは同時に、かれらが植民地帝国日本による異民族支配の一部を構成していたという歴史的事実が忘却されていくことを意味しました。

こうした親世代のテキストに対して、1960年代に入ると、子世代（多くが二世でしたが、三世も少なくありませんでした）のテキストが目立ってあらわれはじめます。かれらの多くは、1920年代から30年代にかけて生まれた、いわゆる昭和一桁世代に属していました。安部公房（1924-1993）など、引揚げ直後から早くも植民地や引揚げにかんする小説を書きはじめていた作家も若干いますが、この世代の引揚者の作品がまとまったかたちで出てくるのは、ようやく1960年代後半から1970年代にかけてのことでした。ちなみにこの時期は、金石範（1925-）や李恢成（1935-）らすぐれた在日朝鮮人文学者たちが続々と登場し、戦後日本の文学史に大きな

インパクトをあたえた時期でもありました<sup>2)</sup>。

朴裕河先生は、本書でほかならぬこうした子世代の引揚者に着目した理由として、「彼らが植民地で生まれ育った少年や少女であったこと、つまり自らの意志とは関係なく、占領地・植民地に身を置かれ、かかわってしまったという、その微妙な「位置」にある」と述べています<sup>3)</sup>。植民地で生まれ育った引揚者たちが置かれたこの「微妙な「位置」」のために、引揚げという歴史的体験のもつ意味は、かれらと「親世代」とでは決定的に異なるものとなっていきます。

本書の主役の一人である朝鮮生まれの戦後作家後藤明生（1932-1999）の感覚では、「母親や兄にとって帰国とは故国へ「帰る」ことを意味したが、自分にとっては「連れてこられた」（『夢かたり』ほか）ことになる<sup>4)</sup>」。そしてそれは同時に、たどり着いた土地（日本）にも追い出された土地（植民地）にも自分の故郷はもはや存在しないという「デラシネ」（五木寛之）——根無し草の感覚を抱いて戦後の長い人生を生きていかなければならないということの意味しました。

本書が——「序説」としてみずからを位置づけた上で——先駆的に挑んだテーマは、「彼らにとっては良くも悪くも占領地や植民地が「故郷」だったのであり、彼らの感受性は、程度は異なっているも植民地の風景や人びとによって培われたものでもあった」という「その微妙な「位置」をとらえ、問題化することだったといえます<sup>5)</sup>。

## 2. 植民地での「奇妙な心理状態」

故郷と異郷が奇妙にねじれてしまったこのような植民者二世たちの「微妙な「位置」」は、日本と植民地という空間関係のみならず、かれら自身と同世代の被植民者たちとの人間関係においてもはっきりとあらわれていました。

「内地」に住む日本人の子どもたちにとって朝鮮人の子どもたちは、ほとんどの場合たんなるよそ者であり、格下の異民族であり、往々にしていじめや忌避の対象でした。ほとんどの日本人の子どもにとって、数的にも政治的にもマイノリティである朝鮮人の子どもは、みずからの存在の基盤をゆるがしたり、みずからが「微妙な「位置」」にあるということ突きつけたりするような、のびきならない存在ではなかったと思います。

しかし、植民地に住む日本人の子どもたちにとっては、事はそう単純ではありませんでした。かれらは、日本だとされているけれども実質的には外国以外の何物でもない土地で、同じ国民だといわれているけれども言葉も習俗もなにかも異なる人びとに囲まれて暮らす日常生活そのものによって、つねに「日本とはなにか」「日本人とはだれか」というような根源的な問いにさらされていたといえます（植民地支配体制という保護膜に覆われていたかれらにとって、そうした問いはあくまでも潜在的なものであったため、そんなことは全然考えもしない場合も少なくなかったかもしれませんが）。

そのような立ち位置の微妙さについては、本書でもさまざまに言及されており、いろいろととらえ方が可能でしょうが、ここでは、小学校から中学校時代までの時期を現在の韓国のソウル（当時の日本名は京城）で過ごし、戦後は新聞記者になって朝鮮とかかわりつづけた田中明（1926-2010）の回想を、ひとつの手がかりにしてみたいと思います。

田中は、小学生時代の遊び仲間だった一人の朝鮮人少年について、じつに印象的な回想をしています。田中によれば、「ちょっとガキ大将のようなところ」があったその少年「李君」は、「日本人に対しては、よく対抗意識を燃やし、「オイ、日本人はケンカ弱いな」なんて挑発してくるわけです。こちらは、弱くなんかないという、それじゃあやるか、ということになったりする<sup>6)</sup>。」日常の次元では、李君は日本人に対抗心をもつ民族主義少年だったわけです。

ところが、1937年の盧溝橋事件を皮切りに、かれらの暮らす京城と地続きの中国で、いよいよ本格的な戦争がはじまります。京城からも兵士たちが続々と出発し、人びとは戦況を伝える新聞記事に一喜一憂するようになる。そんななか、号外などを熱心に読む李君は、「本日の鯉登部隊のごときはな、何千の敵をけちらし、一日に何キロの道を進撃したんだぞ……」といった具合に、「自分が部隊の参謀にでもなったかのように、誇らし気に戦況報告をまくしたてる<sup>7)</sup>」。

このように李君にしょっちゅう戦況報告を聞かされて辟易する田中少年は、中国で「敵」を蹴散らす日本軍の「活躍」をさも誇らし気に語る李君をみて、どうも奇妙な気分になったといえます。

彼はいつも、日本人はけしからんといった態度をとっていた。そのけしからん同じ日本の軍隊が、いくら勝ちまくっているからといって、お前がそういばらなくてもいいじゃないか……。私は自分の疑問を、彼には何も伝えませんでした。しかし、そのときに私が味わった、何かわかるようなわからぬような、チグハグな感じというものは、ずっと私の内にしこりとなって持続されているような気がします<sup>8)</sup>。

その一方で田中は、自分たち日本人のほうにも「奇妙な心理状態」があった、と打ち明けています。たとえば、中学一年だったある日の下校時のことです。仲間たちと、試験がおわった解放感のためにいつもより浮かれた気分で帰る道の途中、話が「高等普通学校」のことになります。田中によれば、それは日本人と朝鮮人が共学する中等教育機関で、日本人の場合は中学校に入学できなかった者が行くところでしたが、朝鮮人の場合は中学校以上に進学する人数がそもそも非常に限られていたため、高等普通学校には優秀な生徒たちが集まっていたといえます。

その学校の話をしているうちに、仲間のうちのだれかがこんなことをいい出しました。「あそこで成績のいいのはみんな朝鮮人だそうぞ」、「その頭のいい連中はみんな反日で、歴史の時間なんかには、日本人はけしからんといって、みんな教師に喰ってかかるそうぞ——<sup>9)</sup>」

それを聞いた田中は、思わず「それはそうだろうな」と相づちを打ちかける。すると、かれより一瞬早く、別の友だちが「それはそうだろうなあ」といったのです。「自分が口を切ろうとしたまったく同じ言葉を、横合いから突然にいわれて、私はハッとしました。その友だちは、ふだんそんなことなど考えそうにもないタイプだったので、よけい私にはショックでした。ああ、あいつも、そう思っているのか……と<sup>10)</sup>。」

この一見なんでもない出来事が、田中の胸にその後も長くもやもやと残るようになります。

いまから考えると、日本人のコロンの息子たちが、あのとき、どうして、頭のいい朝鮮

人が反日に走るのは当然だと考えていたのか、いまだに私には明確な説明ができません。しいていえば、朝鮮人を差別してはいかんといい大義名分論を、耳にタコができるほど私たちに聞かせていながら、それと反対のことをしている大人たちに対する反抗心からかもしれません。あるいは、自分たちにも浸透している朝鮮蔑視に対して、大義名分の方からチクチク刺されて、後ろめたさがあったからかもしれません<sup>11)</sup>。

このように田中は、植民地で日本人と朝鮮人の子ども双方がそれぞれのかたちではまりこんでいた「奇妙な心理状態」について回想しています。李君のなかでは、朝鮮人としての民族意識と、本来はそれと原理的に敵対するはずの皇国臣民としての帝国意識が奇妙に同居しており、田中がみた限りでは、かれはそのことを矛盾だと感じていないようでした。李君のような身近にいる朝鮮人を見て「何かわかるようなわからぬような、チグハグな感じ」をかかえこむ一方で、田中ら「コロンの子供たち」は、朝鮮人が日本を憎むことについて、「それはそうだろうなあ」——自分たちが憎まれるのは当然だと思ふ感性を、ある程度共有してもいたのです。このような感性は、「内地」にいる日本の子どもたちが体得し共有するのはむずかしかったらうと思います。

ほとんどの植民者一世たちが意識的にしろ無意識的にしろそうであったように、当時の田中のような子どもたちにも、特権的な生活に裏打ちされた朝鮮人に対する強烈な優越意識と差別意識がありました。しかしながらかれらは、それと同時に、大人たちからやれ「内鮮一体」だやれ「一視同仁」だとさんざん聞かされていながら、そういう美辞麗句がどこまでもたんなる建前にすぎないということを、普段の生活を通してなんとなく気づいていたのです。田中の回想には、朝鮮人を単純に「二等臣民」と突き放しきれない微妙な距離感や、「内地」に住む日本人の子どもたちよりも被植民者の怒りがはるかに実感的に理解できるような気がするというある種の後ろめたさの感覚がよくあらわれています。

李君の矛盾を目の当たりにしたときの「何かわかるようなわからぬような、チグハグな感じ」は、以後もずっと「しこりとなって持続されている」。また、「日本人のコロンの息子たちが、あのとき、どうして、頭のいい朝鮮人が反日に走るのは当然だと考えていたのか」についても、いまだに「明確な説明」ができない……このように、なんともすっきりしない植民地の謎を、捨て去ることも忘れ去ることもできないまま戦後日本に持ち帰り、その謎と粘り強く向き合うことによって生まれたのが、ほかならぬ「引揚げ文学」だったのではないのでしょうか。朴先生の『引揚げ文学論序説』がすくいとろうとしたのは、植民地の風物や人びとに対する植民者二世たちのこのような複雑で微妙な感情が、かれらの戦後の生と文学にどのように反映されているか、そしてそれがどのような今日的意義をもっているか、という問題だったのではないかと思います。

このことにかんして、『引揚げ文学論序説』のなかで私がとくに興味をひかれた箇所をひとつ挙げてみます。朴先生は、朝鮮生まれの梶山季之(1930-1975)の植民地小説「性欲のある風景」のなかにさりげなく挿入されている「それこそいわゆる歴史史料には出てこないような、目立たない差別の情景」の描写に光をあてています<sup>12)</sup>。原文テキストによれば、それは「[青少年学徒二賜リタル勅語]奉戴の記念式典の日」、朝鮮総督府前の広場に京都市内の小学生を除く全学

生が集結し、整列させられていたときのことでした<sup>13)</sup>。このとき日本人の主人公は、朝鮮人が「同じ日本人だと教えられ」ながら「ハッキリ日本人と差別待遇され」ているところを、否定しようのないかたちでまざまざとみせつけられます<sup>14)</sup>。1930年生まれの梶山はこの勅語が発表された1939年当時まだ小学生でしたが、なんらかのかたちでかれ自身の体験や見聞がもとなっているのではないかと考えられます。

壇上に現われた南朝鮮総督に対し、「<sup>つ</sup>捧げ銃」の号令がかかったとき、僕は日鮮の間に見事に劃された差別待遇の姿をまじまじと眺めた。僕たちが手にしていたのは、<sup>くろず</sup>黝んだ重い鉄の膚を持つ三八式歩兵銃か、悪いといっても騎兵銃か村田銃であるのに、隣の列の朝鮮人中学生が捧げ持っていたのは、先にタンポのついた木銃ばかりなのだ。

この鉄と木とで構成された捧げ銃は、頗る滑稽であった。僕たちの間からは、忍び笑いの色があつた。そして彼等は皆恥ずかしそうに肩を落している<sup>15)</sup>。〔ルビ原文〕

この場面を引用した朴先生の分析をみてみましょう。「こうした場面が注目に値するのは、拷問や虐殺のようなどちらかという少数ではない、多数が経験したであろうこうした〈支配〉の本質が見事に描かれているからです。そして、こうした隠微な場面こそが、元宗主国と元植民地が共有し記憶すべき状況だからです。しかし戦後日本と解放後韓国は、こうした場面をもに忘れてきました<sup>16)</sup>。」「彼ら〔朝鮮人中学生〕は与えられた事態を「恥ずかしそうに」受け止めています。〔……〕後に朝鮮の人たちも徴兵の対象になり〈帝国軍人〉となって日本人と一緒に戦うことになりますが、この「恥ずかしそうに」といった一言がじつに多くのことを示唆しています。つまり、彼らの多くにとってそれは単に恥ずかしいこと、つまり男として、一人前に待遇されないことへの恥ずかしさとして受け止められたのであって、そうした心境は、後に彼らが徴兵をどのように受け止めることになるのかまで示唆しているのです<sup>17)</sup>。」

これはたしかに、大戦末期に実施された朝鮮での志願兵制度や徴兵制にかんする重要な「示唆」でありえるでしょう。ただ、この「恥ずかしそうに」は、額面どおりに受けとって済ませるわけにはいきません。銃を模した棒切れで「捧げ銃」をさせられた朝鮮人学生たちがみんな「恥ずかしそうに」していた、と解釈したのはあくまでも日本人である主人公——そして日本人である作者——なのであって、朝鮮人学生たちは主人公が到底感じとることのできないさまざまな感情を抱えていたかもしれない、ということには注意が必要でしょう。恥ずかしさとはやはり質の異なる、言い知れぬ反感や憎しみをいだいていた者も少なくはなかったはずです。

朝鮮人学生たちに対する植民地権力の露骨な差別待遇にショックを受けた主人公は、日本人学生たちをも観察しますが、「仲間たちは、優越感を露骨に顔の色に浮かべて、日本人である特権を誇示するように胸を張り肩を怒らしていた<sup>18)</sup>。」朝鮮人に劣等意識を植えつけることと日本人が優越意識を保つことがセットになっているのが植民地帝国であり、日本人たちは、朝鮮人たちが恥と屈辱感にまみればまみれるほど、自分たちの特権性と「優秀性」にいつそう酔うことができたのでした。このような植民者の自己陶醉と被植民者の恥辱は、植民地体制を根拠から支える巨大な精神的資源になっていたといえます。

ちなみに、この場面のつづきをみると、植民者二世の主人公が、大人たちが順応し運営して

いる植民地機構の欺瞞を見事に暴くつぎのような場面があります。

僕はその時、やり切れない、ひどく沈潜した感情に襲われたのだ。その日帰宅してから、僕はこの時の疑問を父に訊き質した。父は、「莫迦だな。彼奴たちに鉄砲を持たせたら、一べんで暴動が起るじゃアないか！」と云った。「だって、同じ日本人なんだろう？」僕の質問に父は不思議な答え方をした。「いま、日本は戦争しているんだよ<sup>19)</sup>」

ところで、いうまでもないことながら、戦後日本で「引揚げ文学」が書かれはじめたころ、日本の植民地はすでにこの世に存在しませんでした。したがって、植民地を描く「引揚げ文学」はすべて、作者の回想にもとづくものでした。これは、当たり前のことのようにでありながら、「引揚げ文学」を考える上でつねに念頭に置いておくべき問題です。朝鮮で生まれ育った森崎和江はこう語っています。「わたしがものを書き出したのは昭和三十年代に入ってからだが、原体験である朝鮮——かつての植民地朝鮮——に、直接ふれ出したのは三十代もなかばを過ぎてからだった。そしてそれは、原体験そのものにふれるというよりも、フィルターをかけた写真のように、敗戦を契機としてわたしの心がふりかえった植民地朝鮮であった<sup>20)</sup>」

このように森崎は、戦後日本という時代・空間にもとづく不可逆的な「フィルター」を通してでなければ決して「原体験である朝鮮」に触れることはできない、ということを実感していました。したがって、森崎の作品をふくむ「引揚げ文学」は、戦後日本という時代・空間においてこそ想起可能であった植民地表象を反映し、かつそれに束縛されている、ことができます。そしてそれは同時に、戦後的「フィルター」によって濾過されてしまった記憶の影や痕跡が無数に存在するというを示唆します。「引揚げ文学」を読むときは、それらを丁寧に読みとっていかなければならないでしょう。

このことにかんして朴先生は、とくに後藤明生の作品を手がかりにしながら、こう述べています。「後藤は、「懐しいと言ってはならぬ」として、甘い記憶と表現を極力抑制した小林勝と違ってくり返しさまざまな記憶を振り返り書き残し、「語る」ことの可能性と権利を主張した<sup>21)</sup>」

同じ朝鮮生まれの小林勝と後藤明生が、戦後まったく異なる方向からそれぞれの朝鮮の記憶を表現したように、「引揚げ文学」はきわめて多様なものでした。この多様性については、『引揚げ文学論序説』でとくに強調されています。

### 3. 「未引揚げ文学」としての在日朝鮮人文学

多様性といえば、『引揚げ文学論序説』では、文字どおりの日本人引揚者の文学にとどまらないさまざまな文学の可能性に目を向けることにも注意がうながされています。本書で提唱された「引揚げ文学」の可能性の奥行きとひろがりをはっきりと感ぜさせるのが、「未引揚げ文学」という概念です。本書では示唆されている程度ですが、これは「序説」としての本書から私たちがはっきり引き継いでいくべき非常に重要な問題提起だと私は考えます。

朴裕河先生のいう「未引揚げ文学」とはなんのでしょうか。字義どおり受けとるなら、「引揚げ(られ)なかった人による文学」、あるいは「まだ引揚げていない人による文学」ということになる

かと思います。

そもそも「引揚げ文学」は、当然のことながら、引揚者によって書かれたものである以上、書き手が日本にたどり着いた、つまり引揚げがともかく完了した、という単純な事実がその前提になっています。しかしながら、歴史を振り返ると、引揚げの道を歩き抜いた人ばかりではありませんでした。そこには、生死を問わず、さまざまな理由から後ろに取り残されてしまった膨大な数の人びとが存在しました。親を埋葬した子、子を置き去りにした親、生き別れた親子、兄弟、夫妻……こうしたことは、日本に生還した引揚者たちが口を固く閉ざす、あるいは開こうにもうまく開けないことになる深いトラウマになったと思われまます。

「引揚げ文学」を考えるとこのことをけっして忘れてはならない、という主張は、『引揚げ文学論序説』の柱のひとつになっています。「たとえば「外地日本語文学」といった視点は、その後再移動できなかつた者、「未引揚げ者」たちについての想像——いまだ書かれぬ、あるいは目に触れることのできぬ「未引揚げ文学」の可能性には目を向けぬ。植民地や占領地に残ることを余儀なくされた人びとの物語、たとえば日本人妻、中国人や朝鮮人との間に生まれた混血の子どもたち、孤児たち、売られた子どもたちの物語などである<sup>22)</sup>。」ここには、日本への引揚げののち、戦後また（南米など）別の土地に旅立っていった人びとも加えられるべきでしょう。

「未引揚げ文学」についてとりわけ傾聴に値すると思われるのは、つづくつぎのような指摘です。

それらは、定住者マジョリティ社会のなかでマイノリティ化され、いまのところその声が「文学」として聞こえてくることはない。そして、そのように考えたとき、戦後日本文学のなかで長らくマイノリティ文学でしかなかった「在日文学」もまた「未引揚げ文学」のひとつであることが見えてくるだろう<sup>23)</sup>。

「外地日本語文学」が、従来の「文壇」／首都／宗主国中心主義に対する批判意識を内包しているとすれば、「引揚げ文学」には、宗主国と植民地の文学に共通してみられる土地と人間の静的、固定的な関係性という前提、すなわち定住者中心主義に対する批判意識があるといえます<sup>24)</sup>。したがってそれは必然的に、定住者中心主義から弾き出された（あるいはそれに与しない）人びとの言葉——「未引揚げ文学」への想像力をふくむものとなります。このような「未引揚げ文学」という視角を提起したことは、『引揚げ文学論序説』のもっとも大きな功績のひとつであると私は考えています。

そこで、依然として定住者中心主義の支配する「戦後日本文学のなかで長らくマイノリティ文学でしかなかった「在日文学」もまた「未引揚げ文学」のひとつであることが見えてくるだろう」という朴先生の問題提起を受けて、在日朝鮮人文学を「未引揚げ文学」としてとらえなおすとしたらどのような視野がひらけてくるだろうか、ということをおしだけ考えてみたいと思います。

植民者二世の「故郷」と在日朝鮮人の「故郷」の関係について、平田由美氏はつぎのように述べています。「植民者二世にとっての引揚げがディスプレイメントとしての移動とみなしう

るのは、去らなければならなかった場所が主観的には彼らの「故郷」だったからであり、そうであるにもかかわらず、その「故郷」は本来、自分以外の「他の誰か」が占めるはずの場所だったからである。他方、在日朝鮮人二世にとって、生まれ育ち、おそらくこれからも生きるであろう場所としての日本の地は「故郷」とはみなされない。彼らにとって生まれた場所が「故郷」になりえないのは、そこが「日本人」という「他の誰か」が占有し、自分たちの存在を拒絶し続ける場所だからである<sup>25)</sup>。」

在日朝鮮人文学とのこのような複雑な関係をどうとらえるかという問題は、「引揚げ文学」をより立体的に理解する上で重要な要素になってくるのではないかと思います。

解放後の在日朝鮮人文学をみますと、引揚げの話がしばしば出てきます。たとえば、金鶴泳は小説「遊離層」(1968)のなかで、国というものに対する感覚をめぐって、国を奪われた時代を生きてきた一世である父親とたびたび衝突する在日朝鮮人二世の青年を登場させています。大学で学び、父親の祖国(朝鮮民主主義人民共和国)礼讃に疑問を抱くようになったかれは、しかし「おやじの気持もわかる気がする」と、弟につきのような話をします。「国の背景があるというのは、心強いことだ。日本が戦争に負けて、朝鮮や満州に住んでいた日本人が引き揚げねばならなくなったとき、彼らは着のみ着のままのみじめな姿で、朝鮮の南の果てまで流浪しなければならなかったんだが、現地人の憎悪の目に追い立てられ、さんざんな目に合いながらさまよわねばならなかった彼らの悲惨は、国の背景を喪ったものの悲惨にはかならない。そのときの日本人の流浪の姿は、長いあいだの朝鮮人の姿でもあっただろう<sup>26)</sup>。」

在日朝鮮人二世のこの語りは、重要な問題をふくんでいます。戦後日本に生きるかれは、「国の背景を喪ったものの悲惨」という共通点から、日本人引揚者の経験とつなげるかたちで、植民地期の朝鮮人の経験、そしてその延長線上にある戦後日本における自分たち(在日朝鮮人)の経験について思考しようとしています。このような想像力は、引揚者の経験を我が事として引き受けるところか、戦争にかんする国民の苦労話や被害物語のひとつとして表面的に処理してきた戦後日本人の態度よりも、はるかに近く「引揚げ文学」に寄り添っている、といえるのではないのでしょうか。そして逆に、日本人たちの「引揚げ文学」のうちに、日本人引揚者とすれちがうかたちで祖国へ帰っていった朝鮮人や中国人、そして日本に残ることになった在日朝鮮人と自分たちの経験をつなげる想像力があつたのか、なかったとすればそれはなぜなのか、そこはとくに注意深くみていくべきでしょう。

ちなみに、この在日朝鮮人青年の恋人の日本人女性は、父親に結婚を反対されてかれとの仲を引き裂かれますが、その父親というのは、かつて朝鮮北部で警察官をしていた男で、さんざんひどい目に遭わされながら命からがら引揚げてきたせいで、朝鮮人を心の底から憎悪し侮蔑していました。

このように、引揚げやそれに関連する戦後日本での日本人や朝鮮人の話は、在日朝鮮人文学のなかにも少なからず出てきます。それゆえ、「引揚げ文学」の担い手を日本人に限定してしまうことは、その可能性を不当に狭めてしまうことになるでしょう。「未引揚げ」もふくめ、この「引揚げ」という概念を、占領地や植民地からの日本人の引揚げのみならず、植民地帝国日本の崩壊後に起こった人間の移動、というふうにとらえるなら、なおさらそうだといえます。そのようにとらえなおすと、解放後の在日朝鮮人の文学と歴史は、まさに「未引揚げ」——「未



完の引揚げ」,「未発の引揚げ」という要素をうちにかかえた、緊張感とダイナミズムにみちあふれたものとしてあらわれてきます。

ところで、金鶴泳の「遊離層」が発表されたのは、「金嬉老事件」が起こる直前のことでした。1975年に無期懲役の有罪判決が確定し、刑務所に入った金嬉老は、1999年に、韓国への強制送還および日本への再入国をしないという条件つきで仮釈放され、韓国に「帰国」します。

このことにかんして、尹健次がつぎのように述べています——「三二年間獄中生活を送ったという金嬉老は、『われ生きたり』(新潮社、一九九九年)という本を書くが、その最後の「あとがきにかえて日本人への手紙」にこう記している。「日本で生まれ、日本で七一歳まで暮らしてきた私は今、生まれて初めて祖国の地へ来て、新たな生活を始めています。一九九九年九月七日、韓国・釜山の金海国際空港に降り立った私は、故国の人々から熱烈な歓迎を受けました。……しかし、同時に私の心の中から、日本の美しい風景や素晴らしい人情味あふれた日本の皆さんのことを忘却させてしまうことも出来ないのです」と。病に倒れた金嬉老が、最後の最後まで願ったこと、それはもう一度日本の土を踏むことであった<sup>27)</sup>。」

朝鮮の解放からじつに半世紀以上が経過してからなされた戦後日本生まれの金嬉老の韓国への「帰国」は、はたして「引揚げ」ということになるのでしょうか。この問題を「引揚げ文学」との関連のなかで考えるとすれば、どのようなことがみえてくるのでしょうか。

朴先生は、引揚げにかんする戦後日本の言説の代表格といえる舞鶴引揚げ記念館や藤原ていのテキストにおいて、それらが徹底して反戦平和主義的である一方で植民地の問題がすっぱり欠落していることを批判して、こう指摘しています。「「戦争さえなければ」との言葉は、占領地や植民地において被支配の状態が続くことを意味する。戦争によって獲得された植民地・占領地へでかけていったという、国家の「植民」政策を受け入れての「移動」があつてこそその「引揚げ」だったことはまったく認識されていないのである<sup>28)</sup>。」

この指摘は、解放後の在日朝鮮人たちに重くのしかかった「未引揚げ」の問題を考える上でも重要です。かれらの「在日」は、帝国日本による植民地支配あるいは解放後の南北分断のもとでの「移動」があつてこそその「未引揚げ」でした。金嬉老の「帰国」も、このような長大な文脈の上でとらえるべきものでしょう。

#### 4. おわりに——脱中心的な戦後文学へ

先ほど金鶴泳の例を挙げましたが、「引揚げ文学」と在日朝鮮人文学の関連性をより強く意識していたのは、やはり在日朝鮮人のほうだったかもしれません。金石範も、「「在日」とはなにか」(1979)という論考のなかで、小林勝や後藤明生ら植民者二世の植民地体験を念頭に置きながら、在日朝鮮人とはなにか、そして在日朝鮮人にとって日本とは、「帰国」とはなにかといった問題について、多面的に考察しようとしています。

金石範によれば、日本の敗戦以前の植民者二世たちは、親世代とちがいで、「無意識のうちに“朝鮮が日本だ”と思うように作られて」いたのに対して、在日朝鮮人たちは「過去の植民地時代においても、そして現在においても」「日本が朝鮮のものだと思つたことがないし、彼らにとって日本が朝鮮であったためしがなかった。」このような出生国ないし居住国に対するある種の所有

意識の大きな不均衡が戦前から戦後にかけて一貫して継続してきたことを指摘した上で、「この何でもないようなことが、そしてかつての日本人の意識との対比が、いま「在日」とは何かという問いかけのポイントの一つになるものと私には思われる」と述べています<sup>29)</sup>。

この点を踏まえ、金石範は、強盗事件を起こして懲役8年の刑を言い渡された申京煥という在日朝鮮人二世の経験に着目しています。1948年に日本で生まれた申京煥は、1973年に服役を終えて少年刑務所から出所しますが、国外退去命令が出されてただちに大村収容所に連行されてしまいます。強制送還先になったのは、かれにとっては実質的に見知らぬ外国に等しい韓国でした。ところが、船の出航直前にいったん執行停止になり、長い裁判闘争のすえによく「特別在留許可」が下りて、申京煥は無事に日本での社会復帰を果たすことになります。

申京煥が韓国に強制送還されかかったことに対して、金石範は怒りをこめてつぎのような疑問を投げかけます。「韓国籍だから韓国へ追放するという論理は、彼の場合には成立しない。彼にとって、“韓国人”であるべき何か具体的な内実があったのだろうか。いったい韓国のどこへ追放するのだろう。釜山の棧橋か、ソウルか、ソウルのどこなのか。人間の存在が保障される条件のないところへ、ただ韓国籍だから“送り帰す”という<sup>30)</sup>。」

このことが在日朝鮮人のみならず日本人にとっても重い意味をもつのは、金石範によれば、申京煥が「在日」する根拠が、「日本人が日本に生きていること、人間として存在することは何かということと同じ根を持つ」からです。

しかしそれでも、彼は、大村収容所で送還直前にある牧師に対する電話で「先生、私は帰ります」といったという。この「帰る」ということばの意味は重い。「帰らされる」のではなく、また「行きます」でもなく、「帰る」という主体的な発言の背景には、おそらく意識の上での“祖国”があったことだろう。未知の土地をまえにしての「私は帰ります」ということばの響きには人の胸を刺すものがある。私はここに在日二世の思想、自己検証の創造的な展開を見る。日本の“法”に従って「帰る」といつているのではない。それはおれは朝鮮人なのだという、曠野で叫ぶような人間宣言の声である<sup>31)</sup>。

「私は帰ります」——一人の在日朝鮮人二世が「未知の土地」に追放される直前に発したこの「曠野で叫ぶような人間宣言の声」は、朴裕河先生が提起した「引揚げ文学」の多様な広がりの中なかで、どのような意味をもちうるのでしょうか。このような「未引揚げ文学」としての在日朝鮮人文学からのさまざまな問いかけは、今後「引揚げ文学」の研究をより分厚く豊かなものにしていく上でも大切なものになってくるでしょう。

『引揚げ文学論序説』では、さまざまな「中心主義」が批判されています。宗主国中心主義というまでもないことながら、民族中心主義、国民中心主義、男性中心主義。それから、本書の中なかでとくに強調されている定住者中心主義。さらには、少年少女の経験を軽視する大人中心主義や、引揚げの完了を前提とする生き残った者中心主義まで。私たちの物の見方を偏向させ歪ませるおそれのある磁場をもつさまざまな「中心」に対して、つねに注意深くあるべきだということが、本書の全体を通して主張されています。戦後文学を脱中心化してとらえなおそう、というのが、本書のもっとも大きなメッセージだといっても過言ではありません。本書を貫く

こうした中心主義批判には、当然、日本人引揚者中心主義もふくまれます。「曠野で叫ぶような人間宣言の声」が豊かに反響し合う場としての「引揚げ文学」の可能性は、このようなさまざまな中心主義を乗り越えたところに広がっているのではないかと思います。

## 注

- 1) 朴裕河『引揚げ文学論序説』（人文書院、2016年）28頁
- 2) 渡邊一民「解説」梶山季之『族譜・李朝残影』（岩波現代文庫、2007年）225頁、朴裕河『引揚げ文学論序説』36頁参照。
- 3) 朴裕河『引揚げ文学論序説』30頁
- 4) 朴裕河『引揚げ文学論序説』31頁
- 5) 朴裕河『引揚げ文学論序説』30頁
- 6) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」鄭大均編『日韓併合期ベストエッセイ集』（ちくま文庫、2015年）63頁
- 7) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」63頁
- 8) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」63-64頁
- 9) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」64-65頁
- 10) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」65頁
- 11) 田中明「私と朝鮮とのあいだ」65頁
- 12) 朴裕河『引揚げ文学論序説』195-196頁
- 13) 梶山季之「性欲のある風景」『族譜・李朝残影』（岩波現代文庫、2007年）200頁
- 14) 梶山季之「性欲のある風景」200頁
- 15) 梶山季之「性欲のある風景」201頁
- 16) 朴裕河『引揚げ文学論序説』196頁
- 17) 朴裕河『引揚げ文学論序説』196-197頁
- 18) 梶山季之「性欲のある風景」201頁
- 19) 梶山季之「性欲のある風景」201頁
- 20) 森崎和江『慶州は母の呼び声』（洋泉社、2006年）240頁
- 21) 朴裕河『引揚げ文学論序説』50頁
- 22) 朴裕河『引揚げ文学論序説』63頁
- 23) 朴裕河『引揚げ文学論序説』63頁
- 24) 朴裕河『引揚げ文学論序説』23-68頁参照。
- 25) 平田由美「“他者”の場所——「半チョップバリ」という移動経験」伊豫谷登士翁ほか編『「帰郷」の物語／「移動」の語り——戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』（平凡社、2014年）28頁
- 26) 金鶴泳「遊離層」磯貝治良・黒古一夫編『〈在日〉文学全集』6巻（勉誠出版、2006年）149頁
- 27) 尹健次『「在日」の精神史』2巻（岩波書店、2015年）173頁
- 28) 朴裕河『引揚げ文学論序説』96頁
- 29) 金石範『新編「在日」の思想』（講談社文芸文庫、2001年）67頁
- 30) 金石範『新編「在日」の思想』、79-80頁
- 31) 金石範『新編「在日」の思想』、80-81頁

